

耕起によるヒメトビウンカ越冬虫の防除効果

元兵庫県立農林水産技術総合センター ^{よし}吉 ^だ田 ^{かず}和 ^{ひろ}弘
 兵庫県立農林水産技術総合センター ^や八 ^せ瀬 ^{じゅん}順 ^や也

はじめに

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカ *Laodelphax striatellus* (Fallén) により媒介されるイネ縞葉枯ウイルス (Rice stripe virus, 以下 RSV) により引き起こされるウイルス病である (図-1)。兵庫県では、1960年代と1980年代に甚大な被害をもたらしたイネ縞葉枯病の流行があり、1960年代は、苗代から本田期までの防除の徹底や作付

け体系の統一管理、1980年代は本田での防除の徹底により鎮静化した。近年、再び増加傾向が見られており、その背景として収穫期の遅いパン用小麦の栽培の拡大がヒメトビウンカが多発を助長していることが一因と考えられている (柳澤ら, 2016)。

RSVに感染したイネを治療する方法はないことから、対策としては媒介虫であるヒメトビウンカの防除が重要となっている。ヒメトビウンカを防除する方法として

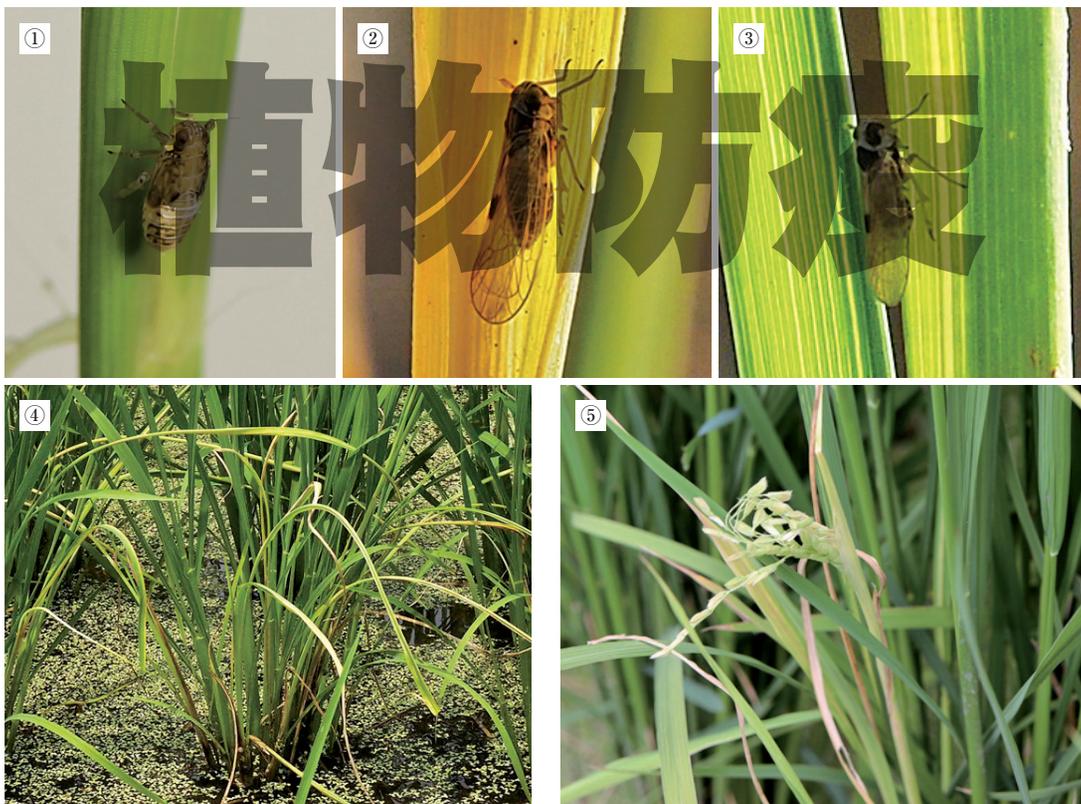


図-1 ヒメトビウンカおよびイネ縞葉枯病発病株
 幼虫 (①), 雌成虫 (②), 雄成虫 (③).
 初期発病株: 葉色が薄くなり, 巻いて垂れ下がる (④). 後期発病株: 葉が縞状に黄化し,
 穂の出すくみが起こる (⑤).
 ただし, 幼穂形成期以降に感染した場合, 病徴は明確に現れない。

The Effect of Plowing on *Laodelphax striatellus* Wintering. By
 Kazuhiro YOSHIDA and Junya YASE
 (キーワード: ヒメトビウンカ, 水稻収穫後, 耕種の防除, 越冬虫)